

地域研究年報

Annals of Human and Regional Geography

第28号

2006年 3月

筑波大学人文地理学・地誌学研究会

Association of Human and Regional Geography, University of Tsukuba

平成17年度筑波大学学内プロジェクト研究 研究助成B

「首都圏におけるバブル経済崩壊後の地域変容に関する社会地理学的考察」報告書

(研究代表者 山下清海)

「地理学野外調査における空間情報技術の統合的活用手法の開発」報告書

(研究代表者 森本健弘)

「地方都市における土地利用変化に関する文化層序学的研究」報告書

(研究代表者 呉羽正昭)

序

九十九里浜とその背後に広がる九十九里平野を含む九十九里地域は、青野壽郎先生や尾崎帛四郎先生、菊地利夫先生をはじめとする著名な地理学者が、多くの研究業績を蓄積してきたフィールドである。南北50km、幅10数kmの細長い地域の自然環境は変化に富み、またそれに対応した多様な経済活動や生活形態、都市や農村や漁村が展開している。さらには、東京や京浜工業地帯といった日本の中心部に近接し、時代ごとの様々な影響をうけてきた。地域調査のフィールドとして多くの研究課題をもっており、魅力的な場所である。この調査・研究は九十九里地域の南部を主な対象とし、茂原市を中心として都市的・工業的現象を、一宮町を中心に農業を、白子町において観光業を取り上げた。また、九十九里町では漁業と水産加工業を中心に検討した。

本報告書は、2004年10月3日から9日までと2005年5月22日から28日にかけて実施した現地調査をもとに作成された。参加者は筑波大学大学院生命環境科学研究科地球環境科学専攻の教員と大学院生を中心とし、それに教育研究科や東京学芸大学大学院生が加わった。また、カナダ・トンプソンリバーズ大学のT. Waldichuk 助教授と筑波大学準研究員の兼子 純博士、筑波大学非常勤職員の岩間信之博士にも参加していただき、ご指導をいただいた。

調査を行うにあたって、初年度には都市班（茂原市の中心性）と商業班（茂原市の中心商店街）、居住班（茂原市の住宅地）、工業班（九十九里平野の天然ガス利用と工業）、観光班（白子町のテニス民宿）、農業班（一宮町の施設園芸）の6つを編成し、次年度に水産業班（九十九里町の漁業と水産加工）を加えた。現地調査の体験を出発点としてそれぞれの研究課題に取り組むという基本姿勢に基づいて、土地利用と景観の観察と記載から始め、聞き取りやアンケート調査によって人口構造や経済活動、生活様式、居住形態、地域組織、住民行動、さらにそれらの歴史的変遷などに関する情報を得るとともに、関係機関・組織からデータを収集した。さらに東京大学空間情報科学研究センターのデータを活用させていただいた。

それぞれの班の調査結果の概要は以下の通りである。都市班は九十九里地域の南部の中心として認識されてきた茂原市の中心性とその変容について検討した。購買行動と通勤行動、交通流動の3つの指標を用いて1990年代と2000年代の2か年の都市システムを示した。その結果、いずれの年次においても茂原市は九十九里地域南部の小中心地を下位とする都市中心システムを形成しており、この地域の中心地としての地位を維持していることが明らかになった。商業班は茂原市における中心商店街活性化のための課題について取り組んだ。ここでは商店および商店街が提供するサービスと消費者のニーズが合致していないことが明らかになった。そして、その要因として、多様性のない業種、行政施策、商店経営者間の意識の相違をあげることができた。居住班は茂原市の住宅地の推移を分析した。茂原市では1960年代以降工業都市として周辺地域から労働力が流入することによって人口が増加したが、バブル経済期になると東京都心から人口が流入するようになり、大都市の通勤圏として位置づけられるようになった。そしてバブル経済崩壊後はベッドタウンとしての性格が弱まり、茂原市内部での地縁や血縁による移動が卓越するようになった。

工業班は九十九里地域における天然ガス利用と工業の特徴を、企業の事業転換に着目して分析した。九十九里地域に天然ガス利用を目的として立地した機械金属工業は、経済環境と製品の変化により立地の優位性を喪失したが、独自技術の開発や継承、事業の多角化によって事業転換をすることができた。他方、天然ガス産業は、ガスの供給先を工業用から民生用へと転換し、かつ天然ガスとともに採取され

るヨードの利用を拡大することによって事業を継続している。

観光班は白子町中里地区のテニス民宿を研究対象とした。白子町では1960年代後半に夏季の海水浴客を中心とした一季型観光地となったが、1970年代にテニス民宿が始まりそれが拡大することにより、1980年代後半から1990年代はじめまでには日本を代表する周年型のテニス民宿地域に発展した。この要因としては、地域リーダーの存在や彼らを支える地域社会があげられるが、時代の変化ごとに民宿経営者が柔軟に対応したことも重要である。現在、テニス民宿地域としての地位を維持しつつも、複合的な観光地へ変化しようとしている。

農業班は施設園芸による野菜生産が盛んな一宮町を対象として、施設園芸地域が維持される地域的条件を、土地利用と農業経営、農業集落組織に注目して明らかにした。結果として、施設園芸産地として確立してから30年以上が経過したが、社会的・経済的な外部環境の変化と、農村の人口動態などの内部条件の変化に応じて、様々な施設園芸の生産形態を導入してきたことにより、産地が維持されてきたことがわかった。水産業班では九十九里町の漁業と水産加工業を主な研究対象とし、個別の経営形態と地域内の協業関係の分析を通してそれらの存続形態を解明した。九十九里町では第2次世界大戦後、特に1960年代以降の漁業資源の著しい減少に対して、漁港の近代化や漁家と水産加工業者の間にあった株制度の廃止などの制度的な転換などにより地域全体で対応しつつも、漁家は協業化することによって、加工業者は個別化し、また経営形態を多様化することによって存続を図ってきた。

この調査に際しては茂原市と一宮町、白子町、そして九十九里町の市役所と町役場、多くの機関や組織、団体、住民の方々のご協力を賜った。また、製図にあたっては筑波大学地球科学系の宮坂和人技術専門職員と小崎四郎技術専門職員の助力を得た。これらの皆様に心から感謝を申しあげる。なお、この報告書の印刷や資料収集のために、平成17年度筑波大学学内プロジェクト・助成研究B（代表者：山下清海、課題名「首都圏におけるバブル経済崩壊後の地域変容に関する社会地理学的考察」）、および同プロジェクト研究・助成研究B（代表者：森本健弘、課題名「地理学野外調査における空間情報技術の統合的活用手法の開発」）、さらに同プロジェクト研究・助成研究B（代表者：呉羽正昭、課題名「地方都市における土地利用変化に関する文化層序学的研究」）による研究費の一部を使用した。

この報告書は九十九里地域の方々の多大なるご協力があつてようやくできあがったものであるが、この地域の記録として、あるいは将来を考える基礎資料として、いささかなりとも役立つことを願っている。

2006年2月20日

田 林 明

目 次

| | | |
|--|--|-----|
| 序 | 田林 明 | |
| 都市システムからみた九十九里地域における 茂原市の中心性とその変容 | 駒木伸比古 李 虎相 藤野 翔 山下 清海 | 1 |
| 茂原市における中心商店街活性化への課題 | 新名阿津子 原田 典子 田上 健一 小林 達也 | 25 |
| 居住特性からみた茂原市の地域構造 | 上江洲朝彦 久保 倫子 原野未来将 松井 圭介 | 61 |
| 千葉県九十九里地域における天然ガス利用による 工業の立地と事業転換 | 淡野 寧彦 丸山美沙子 今野 良祐 高橋 祐士 藤田 和史 兼子 純 | 101 |
| 九十九里浜における観光の地域的特性 - 白子町中里地区のテニス民宿を事例に - | 井口 梓 小島 大輔 中村 裕子 星 政臣 金 玉実 渡邊 敬逸 田林 明 トム・ワルデチュク | 127 |
| 千葉県一宮町における施設園芸集落の地域的特色 | 永井 伸昌 高橋 良輔 白石 寿 深瀬 浩三 仁平 尊明 | 167 |
| 千葉県九十九里町における水産業の展開 | 渡邊 敬逸 飯島 崇 小原 慎平 新 智信 田林 明 | 199 |